

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポルケ谷九〇四 電話(03)337714649

FAX(03)329915367

振替 東京0158431 労金 東京労金本店No1154163

購読料 月額600円 6カ月前納制

### 〈もくじ〉

#### ■巻頭言■

「支持なし・無党派」層の階級的背景	2
新党のメドも総選挙対策も進まず	3
——目的のない社会党の九月大会——	6
連合傘下組合は日経連方針と共同歩調	6
——労組大会前半の特徴点——	10
余りにも恥知らずではあるまいか	10
——フランスの核実験について——	12
「論語よみの論語かたり」をめざしたい	12
——「資本論」第二分冊を読了して——	15
読者からのおたより	15
「政界再編後を読む」(上野建一著)のすすめ	16

◆好評発売中 上野建一著 社会通信刊◆  
 政界再編後を読む——護憲の旗を掲げて

四六判上製、二百頁、千五百円(千三百十円)

# 旬刊 社会通信

## NO. 613

一九九五年九月一日

一九九五年九月一日発行  
(毎月一日・十一日・二十日三回発行)

## ■巻頭言■

## 「支持なし・無党派」層の階級的背景

「転換期」現代の諸相(三)

なぜ「支持なし・無党派」層の拡大なのか。朝日の「定点調査」が社会的に大きな反響を与えたことから、「支持なし・無党派」分析がブームの感がある。統一地方選で意地悪バアさんが既成政党に「意地悪」ぶりを発揮し、ノックおじさんが「パンパカパン」と凱歌をあげたことが、「支持なし・無党派」を一举に「五五年体制崩壊」下、政治の主人公に押し上げたのだ。

ジャーナリズムの手法は、従来の支持政党を聞き、今はどうかを問うもので、ここ数年の政治意識の変化を知る上でたいへんに興味ぶかいことではある。ところが、商業ジャーナリズムの特性としては当然なのだろうが、社会・階級情勢全般と個人の意識が切り離されてしまうことよって、「支持なし・無党派」のダイナミズムが見失われてしまうことになる。

【現代日本人の意識構造・第三版】(NHKブックス)によれば一九七三年から八八年の「支持なし」層は三二・六から三七・八%で推移しており、「支持なし」層が自民支持者にまさるとも劣らない、政治的多数派であった。昨今の「支持なし」層は五〇%前後であるから、従来の「支持なし」層に「支持あり」層から十%強が移行したことになる。問題は従来の「支持あり」層が、なぜ「支持なし」層に転じ、棄権あるいは無効票層となったかである。

「五五年体制」といわれた「自・社」体制下、共産、公明、民社はそれぞれに組織票を基礎としており、投票行動に多少の変化はあれ、選挙結果全体に大きな影響をおよぼすことは皆無であった。自民の悪政、それに対する批判票を社会党が吸収してきたのである。

政界再編成下、この自民と社会の関係にドラスチックな変化が起きた。社会党が全面的な政策転換をおこなった結果、自民党と社会党の政策に違いがなくなったことである。社会党員ですら「迷っている」政党に、国民が票を投じることは困難というわけで、まず旧来の社会党支持者が「支持なし」層に転換するばかりか、自民党への「消極的支持者」たちも行き場を失った。ということは、社会党は浮動票を吸収する魅力を失ったということだ。

自民支持者の投票行動はもつとドラスチックだ。自民支持層は独占資本を中心に、農村地域、年金生活者、お父ちゃんの影響下にある主婦層、さまざまな小零細の業種団体によって支えられていた。ところが、三点セット+α、そして金丸金塊事件等々が相和して、自民党支持基盤を一举に直撃。自民は分裂し、旧自民票も行き場をなくしてしまった。その結果、従来の「支持なし」層に社会、自民「支持」層から十%以上が加わったということがあろう。

しかし、この背後に大きな社会的かつ階級的变化がおこっていることが見逃されてはならない。第一に、中曽根「臨調行革」「民活」路線が、旧来の自民支持層を直撃し、旧来の厚く広い自民支持層が、自民党から離れざるをえなかったことだ。第二に、この傾向は今後ますます加速せずにはおかないことだ。自民は「分裂」の後遺症をいやすため、「行革」路線をゆるめ、旧来の利権構造温存を目的に社会党と手をくんだ。ところが、社会全般は「規制緩和」という現代の大合理化に突き進んでいる。「弱い者」が切り捨てられる。第三に、こうして「弱者」は自ら身を守る術を知らなければならなくなる。「支持なし・無党派」層増大はこれからが本番を迎える。それにどう備え、いまから準備するかが問われる。

(T・つづく)

## 新党のメドも総選挙対策も進まず

——目的のない社会党の九月大会——

### 村山改造内閣は足場を弱める

村山改造内閣が発足したが、内閣・政府の強化にはならなかった。むしろ弱体化して自民党内閣の性格を強めたことになった。もともと首班は社会党でも内容が自民党だったのに加え先般の参院選で社会党は大敗したのだから仕方がない。村山内閣の政治的矛盾がよいよロコツに表面化することになり、政治・行政の混迷が続けば、またまたいろいろな不祥事が起りかねない。

内閣の改造は、内閣の延命策の一つであり、国民に新たな政策の展開を示すものとして有効である。しかしその時期（タイミング）、与党内の意思統一、入閣する人材の優劣、内閣への国民の信頼度、などを首相とその周辺によって慎重に検討してかからなければ失敗する。その点今度は失敗作である。第一に時期が悪く自民党の総裁選をめぐる派閥争いに巻き込まれた。第二に村山首相の頼りにする自民党・河野総裁の政治力不足、さきぎけ・武村代表の求心力の低下によって村山内閣の足場がよいよ液状化していることである。

新閣僚人事では、社会党からの入閣者がお粗末なのに比べ、自民党側はそれなりに政治力のある人材が出ている。社会党の新入閣四人はいずれも旧田辺・右派で村山内閣の自党連立に反対していた人達である。ことに井上一成、森井忠良の両氏は新進党寄りで山花新党の急進派として知られている。政治的節操を求めることは無理にしても少しは自らの言動に責任をもってもらいたいものである。これからこの人達は官僚のいう通りに動き、結局村山内閣のお荷物となる。入閣漏れの日野市朗、竹村泰子、島崎譲、岩垂寿喜男などの各氏は憤懣やるかたないところであろう。

自民党の入閣組はいずれも九月の総裁選挙と次の総選挙を視野に入れた旧派閥の代表格の人物である。派閥は解消したはずなのに「どっこい生きている」ということで、自民党の金丸・竹下時代の復活かと国民に悪い印象を与えたことは間違いない、総裁選でさらに派閥抗争を表面化させている。自民党から派閥が無くなると考える方が無理である。自民党派閥は、保守勢力内の各階層の政治部であって、その利害を代表している。長い不況は、階層間の格差を拡大しており、再編しつつも派閥が強化されて、次の総選挙後にだんだんと保守一党支配体制がつくられてゆく。

自民党新閣僚との関係で注目されるのは、オウム真理教事件をもとに宗教学法改正が求められているが、島村宜伸文相と田沢智治法相はこれに意欲をもっており、これに反対する新進党（創価学会の要求で）との対決が見ものである。このご両人には立正佼正会が応援しており、三塚博新幹事長が「幸福の科学」、橋本通産相は靖国神社と遺族会がついており、宗教戦争の一面もある。小沢・新進党の利権は建設、防衛にあるといわれ、それを断ち切る役割は森建設相、衛藤防衛庁長官にあるという。旧渡辺派の江藤隆実総務庁長官と深谷隆司自治相など反新進党色の濃い面々である。それだけに反面閣内不統一の火種にもなりかねない。

### 自民党総裁選挙のもたらすもの

自民党の総裁選挙は河野洋平、橋本龍太郎両氏の一騎打ちになるらしい。次の総裁はポスト村山の首相になるということが想定されるだけに自民党を二分した激しい争いになっている。旧金丸・竹下派（小沢一郎派が脱落）で現在の小沢派は橋本氏の出身派閥だけにすでに支持を決めており、旧河本派（二〇票）と一般党員（党員一人分で国会議員一人分）の分は百八十票固めたと報じられている。合計二百票だが、さらに渡辺派五十人と加藤グループ（旧宮沢派の一部）が支持となれば橋本氏の優位は動かない。

一方河野氏の方は、所属の旧宮沢派に加え、旧三塚派（三塚氏は幹事長になり派内をまとめた）で百四十票となるが、宮沢派からは前記の加藤紘一グループがどうなるかが課題。河野氏と加藤氏は同じ旧宮沢派なのに大猿の仲。河野支持は地方の一般党員になると薄い。約六〇票とみられており、全合計（有権者票）四九〇票のうち過半数を制するのは橋本氏であるといわれる。自民党得意の談合はできないであろう。自民党内の権力争いであるから国民には関係なさそうだが、連立政府のもとだけにいろいろの波紋がでることは確実である。もし河野氏が落選し、橋本総裁が現実のものとなったとき、どういうことが政治にもたらされるのか大筋をみよう。

(一) まず村山内閣に変化があるか。村山首相は武村氏と共に閣外に去る（総辞職）ことは考えられる。しかしそうなると連立の条件が崩れるので、当面、そうはならないであろう。橋本氏が総裁になっても、河野氏に代わって副総理につくことぐらいでなからうか。橋本氏の所属は旧小沢派だが、小沢派を橋本でまとめるときに連立内閣を壊さないことが条件の一つであったというだけに直ちに橋本総理とはならない可能性が高い。しかし、自民党内には次の総選挙は自民党橋本総理のもとで新進党と戦いたい、そうでなければ勝てないという「危機意識」があつて、総選挙の直前には村山氏から橋本氏へ「禅譲」することになるのではないか。

(二) 社会党もさきげも新党をめざしており、それが十月だと（野坂官房長官と久保書記長は言明）いうのだから、その時期に村山退陣もありうる。その場合でも、閣内（連立に残る）にあつて（大臣待望組もある）で与党で続けるのか、それとも閣外協力ということでは々々非々の立場に立つのか意見が分かれるのである。

久保書記長や横路前北海道知事等の右派は、社会党が新党に踏み切れないのは村山内閣があるからだと見ており、村山内閣の終焉を画策することが考えられる。橋本総裁となれば自民党タカ派（中曽根・渡辺）が党運営の中核となるだけに与党三党による枠組みをめぐる対立抗争が激しくなる。

(三) 自民党の多数は、村山内閣の続投のままでは次の小選挙区制による総選挙で、新進党には勝てない、したがって自民党だけで過半数はとれないと考えており、財界も不況の長期化のなかから思い切った景気対策はとれないとして、村山内閣退陣を求めると同時に「国会の早期解散」を要望しているのである。国会を解散すれば、社会党とさきがけは消滅し、保守二党で議席の三分の二を占めると読んでいる。財界は総選挙後に本格的な新保守主義の諸政策を実行できるとして期待している。

それでは国会の解散はできるのかとなるが、今のままでは無理である。各党共に準備が不十分である。ことに社会党は新党問題をかかえてさっぱり選挙対策（候補が決定的に不

足している)が進んでいない。しかしそういつまでも伸ばせない。そう考えると景気対策の効果の、来る来春以降から秋頃までが考えられる。

### 流れ解散の様相をみせる社会党

社会党は九月二十一日に全国大会を開いて参院選の総括を行うということになった。中執の総括案は、まず新党ありきの言葉は踊っているが中身は何もない。「総括」には、「今回の選挙による議席配分は事実上、保守二大政党に収斂される結果となりましたが、わが党は「これがすべての世論ではない」との認識に立ち、次期総選挙に向けて、この保守勢力に対抗する民主・リベラル勢力の結集に全力を上げることになります」といいながらそのリベラル勢力結集の方向は明らかにしていない。少し具体的なのは、「総選挙態勢の確立を急ぐこと」ぐらいである。社会党の総選挙態勢が遅れているのは、社会党でやるのか、新党でたかのか明確でなく、しかも勝つ展望もないからである。それなのに「独自候補の最大限擁立が基本となります」と総括文章は書いてある。方針と主体が確立していないときどうして、他の「市民団体、女性団体、生協」などと連携できるのか、わからないことをいっている。「自民党や新進党に与しない政治勢力のネットワークを形成し三〇〇小選挙区で闘う体制」ともいっているが言葉だけである。

今、社会党にとって必要なことは、新党とかリベラルとかはやめて、党の主体性をもって組織活動と選挙闘争体制を確立することである。新党も選挙闘争もということになれば党は分散して「流れ解散状況」とならざるをえない。八月十八日の読売新聞は、「ハト派リベラル新党へ」と書き、「全国会議、十月にも」と報じている。この会議は「リベラル(第三極)結集を目指す全国会議」といって、国会議員、学者、文化人などで構成する、という。呼びかけ人は五島(杜党副書記長)、鳩山由紀夫(さきがけ代表幹事)、海江田万里(民主新党クラブ)、横路(前北海道知事)等だ。この会議は村山首相と武村さきがけ代表が七月末に合意した「新党構想」を受けたものだともいっている。何をやるのかという、「一氣に新党」は無理だからその「前段階として次期総選挙」候補を共同候補を擁立して「新党の下地を作ろう」というのが狙いだそうである。これは明らかに新党を党の外につくって新党で選挙したい人は寄っていらっしやいというものである。社会党の流れ解散を促進してその受け皿にしようということのようだ。これを推進するとすれば全電通労組などが賛同するであろうが、社会党の大勢は賛同できまい。この本当の狙いは、①社会党の左派・護憲派を切るための選別の方途、②いかにも今までの政党と別だという印象をもたせるため、③第三保守党の政策・方針を各党派から離れて(注文を消して)確立する、などであろう。横路と久保構想である。村山、武村の名は出ているが実際は別である。一挙に世代交代をはかることも考えている。きわめて派閥的な発想である。それは成功しないが社会党解体には役立つであろう。

(政権研究班)

## 連合傘下組合は日経連方針と共同歩調

### — 労組大会前半の特徴点 —

労働界は惨敗に終わった九五春闘、参議院選挙（7・23投票）を経て七月から九月にかけて大会シーズンに入った。

今年の論議の焦点は春闘総括と今後の春闘の在り方、混迷する政界再編と参院選総括に向けられるが、もう一つさけて通れない問題は、二一世紀に向けて政・官・財一体で打ち出している産業構造転換、雇用の大流動化戦略がもたらす大失業、大競争時代に突入する労働側の雇用、日本的労使関係の改変に対する対応である。

またすでに終了したJ・R連合第四回大会（6・14〜15）とJ・R総連第一一回大会（6・25〜26）、国労第六〇回大会（7・27〜28）のJ・R労働戦線の動向、合化労連大会（7・19〜20）と全国化学大会（7・14〜15）での組織統合問題なども注目されたところだ。しかし今回は大会レポート第一弾として、今後の春闘の在り方に関する労使の考え方を整理しておきたい。

### 問われる春闘のあり方

連合はすでに第二〇回中央委員会（6・8）で菅田会長が「ヤマ場に向けて確認した昨年実績の確保はならず、不満足な結果であった」と率直に敗北を認め、闘争のあり方について、連合とドイツDGBとの定期会談をとりあげドイツ金属労組が一年ぶりにストライキを行い、九五年は平均四％、九六年は三・六％の賃上げを獲得したことを紹介しつつ、「平和裡に解決するために最善をつくすのは当然のことだが、しかし納得がいかない場合には、はっきりノーと言い、行動に示すことが大切だ」と強調した。

また日経連の「新時代の日本的経営」に対して「疑問がある」として、①総人件費管理の徹底は人件費削減を意味していると思われるが、人間性尊重の経営とどのようにバランスするのか、②個別人事管理の徹底が提唱されているが、競争意識が強まり、職場の一体感が薄れることを指摘、日経連報告に対し、真の人間尊重の視点から働く側の論理を打ち立て、対応していかねばならない、との見解を表明した。

春季生活闘争のまとめ、今後の改革案についてはすでに紹介されているが、再確認しておく意味で、鷲尾事務局長の総括、改革案にふれておきたい。

全体として不十分な結果と総括し、今後の課題として、まず①改革を進める三つの課題として（イ）個別賃金方式への九八年度からの転換を目標に今後も額要求を中心とした要求を個別賃金での回答引き出しを目指す。（ロ）ヤマ場の拡大（第一のヤマ場設定）（ハ）中小共闘センターの継続、をあげ、②産別自決と連合の調整機能の役割分担の明確化については次の二点をあげた。

（イ）構成組織は、相場形成に責任をもった産別自決の取りくみに努める。回答不満の場合は妥結留保またはストにより相場引き上げに取りくむ。

（ロ）連合は、賃上げ、時短、政策の三本柱の取りくみとし、三つの要求目標を提示する。構成組織を協議しながら、相場引き上げとなるヤマ場の設定、「ヤマ場に向けた確認」などの戦術調整を行う。

連合としては歯止めを意味する「ヤマ場に向けた確認」を明記するなど、それなりに前向きの方針提起だが、質疑討論ではこの中央案に限らず、連合中執、全構成組織代表会議、中小共闘センター、各部門別会議などあらゆるところで、「全体相場に支障をきたす離脱組合」全電通批判が行われ、これを調整できなかつた連合の調整能力に疑問が投げかけられている。

各産別大会の議論でもここに論議が集中するだろう。九六春闘に向けては一〇月二六日の中央執行委員会で「基本構想」を確認、十一月一日に中央討論集会、十一月三日第一回中央委員会で闘争方針を提起する。なお一〇月五・六日には第四回大会が開かれる。

#### 各産別は日経連方針を容認

しかし問題は連合の春闘改革案と日経連の全面的な春闘改革案には大きなズレがあるということだ。実は九五春闘の交渉で経営側はJIC系各産別にそれぞれ改革案を提示し、各産別の新年度運動方針はこれを容認する方向で検討を開始しているのである。

〔電機連合〕九五春闘の産業別統一交渉及び各社別交渉で経営側から次の五項目が提案された。

- ①円高、空洞化、価格破壊等により、今後しばらく実質経済成長率は一〜二%台の低成長にとどまる。
  - ②企業は絶えざるリストラ、コスト競争力の強化、新分野の創出を求められており、従来の雇用システム、処遇システムについて見直しを迫られている。
  - ③今後しばらく日本経済、経営の体質転換を余儀なくされ、春季交渉のテーマとして、その対応を話し合う。
  - ④賃金改訂は経済との整合を基本とし、業績の変動は賞与による対応を原則とする。
  - ⑤個別賃金については労使で検討すべき課題が残されており、その解決を前提とする。
- 〔新日鉄〕日本経済、鉄鋼産業についての基本的認識の説明のあと、製造業が生き残る条件として「高コスト構造の是正」に続いて「春季交渉の見直し」をあげ、次のように主張している。
- ①日本の名目賃金は世界最高水準に達している91年のデータでは製造業で日本の時間当り賃金を一〇〇とすると、アメリカは六九、韓国は二八、鉄鋼産業では九三年日本を一〇〇として、アメリカ七〇、韓国二五となっている。
  - ②名目賃金の格差をこれ以上拡大するような賃上げは、国際競争にさらされている産業にとって致命傷となる。そのためには毎年一回の横並び型賃上げの春闘の慣行を変革していく必要がある。
  - ③また同一産業内の企業間業績格差が拡大しつつある実情の中では、常に産別の統一が出来るとは限らない。

「賃金決定のあり方の具体論」では、毎年ベアを実施できる状況にない、として、——  
 ①昇給 今後ベアによる賃金上昇が望めない状況においては、従業員活力の向上、従業員生活安定の観点から、昇給については堅持していく。年功的性格の見直しを図りつつ昇給のよりの確な運用をはかる。

今後は年功的給与における全社員一律的な運用を見直し、企業内における能力・業績の伸長に対応した考課機能と、教育等生計費用の変動に対応し、労務費コストの自然増を回

避けつつ、一定の財源のもとでより公平な財源配分を行う。

高炉各社については既に年功的給与の比率を圧縮するとともに、生計費に立脚した年齢別基本加給と、資格に立脚した考課給である基本給本給を導入している。

② ベース・アップ 毎年、各産業・企業が横並びで実施すべきものでなく、あくまでも中期的な生産性向上の結果として実施されるべきものである。協定期間の長期化の場合、雇用保障は、経済条件の大幅な変化等例外条件付きでうけ入れられる。物価スライドは絶対に受け入れられない。

③ 賞与 短期的な業績反映が求められる。交渉は現行通り毎年の交渉とする。

#### これまでの労使関係を全面的に改変

〔トヨタ自動車〕 春闘の歴史と限界を分析したうえで、「これからの賃金決定とのあり方」について次のように主張している。

① 従来の「定昇」概念は崩壊する。低成長、高齢化の中で、包括一元管理的な人事制度は不可能となり、企業業績の向上に高い貢献のできる人を、高く処遇していくシステムになる。人事システムの変化に伴い、昇給も「加齢に伴う自動的昇給」から「資格昇給と能力・業績評価による昇給」に変わっていく。このため、能力の発揮によりどんどん昇給していく人と、あるレベルで昇給が止まる人と大きな差がでる。このように従来の「定昇」概念は崩壊し、労使交渉の対象とはならない。

② 物価上昇分については、経済成長に伴う適正水準の物界のみ賃金に反映していく。安定的成長にある程度のインフレは必要であり、この分は実質賃金を低下させないよう昇給に反映させてもよい。しかし現代の物価は内外価格差によるものが大きく、昇給によって補うのではなく、日本の高コスト体質を改めるものと区別していく。

③ 労使交渉は「適正物価上昇分」を含む「ベア」の最低基準を対象とする。春闘による「集団的平均賃金決定」は、「ベア」の最低レベルを（物昇分）決定していけばよい。個々人の昇給は「ベア」の最低基準を満たし、さらに能力・業績評価に応じて、個別に昇給させていく。

④ 業績に伴う成果配分は、ボーナスによって反映する。

⑤ 公共性の強い産業、保護・規制のもとにある産業は「コスト＋利潤」という考え方に立つのでなく、内外価格差に十分配慮して価格設定を行い、その上で労務費を含めコストを適正化する。

以上のほか、さらに「今後の労働組合の役割」について――

① 上部団体や主要組合の交渉により「ベア」について「ミニマム昇給」が決定される。個別労働組は、個々の業績の成果を、主にボーナスに反映するよう交渉する。個々人の賃金や賞与は、交渉により決定された最低基準を満たしながら、その人の能力、業績により大きな範囲で査定され、決定される。

② 「春闘」は政策制度課題に取りくむ比重を増やしていくべきである。

③ 労働組合は、組合員からの多様な情報を集約し、生活者の視点に立った提言や働きかけを行う「情報集約、発進センター」的役割が求められる。

以上、紹介が長くなったが、こういう露骨なこれまでの労使関係を全面的に改変して、労働者を分断し、能力主義管理の全面競争時代になげこむ提案を、労働側はほぼ容認して



いるのである。

#### 隔年春闘奉仕を提案（電機）

日経連の「新時代の日本的経営」はこういう各社の新方針を集約、統合したものであり、各社はまたこれにもとづいて全面的な合理化攻撃に乗り出してくるのである。

電機連合第四三回大会（7・6、7）で岩山委員長は克服すべき緊急課題として、①異常円高の是正、②雇用安定―内需拡大、③規制緩和の積極推進、経済構造の転換、④金融システムの安定、⑤一日も早い阪神復興、などまるで大独占資本の代表の発言かと思わせるような課題をあげ、今後の賃金交渉について「今後は中期的視点でとらえ、経営側の五項目提起を積極的を受けとめ、賃金の隔年協定も視野に入れて、抜本的改革をはかる」と隔年春闘方式を労働側では初めて打ち上げた。

また新たに第五次産業政策「創造と革新への挑戦」を提案し、この中で「新たな賃金決定システムと処遇のあり方」を打ち出し、年功制賃金の見直しは中高年にしわよせがこないようソフトランディングすべきこと、長期継続雇用（日経連と同じく終身雇用制という言葉は消えている）は基本的に維持するなどの条件をつけながら、年功賃金の見直しと複線型人事管理について、能力重視の成果反映型への変換を容認する態度を打ち出している。鉄鋼労連は経営側の提案をうけて、今後当分、ベア要求を放棄して「定昇+物価」中小労組はプラス格差是正の実質賃金維持にしばらく方向を提起し、今秋の大会で決定する。

造船重機労連も、毎年ベア交渉の見直しを打ち出し、「すべてを一流に」のスローガンから「雇用安定」を第一にかかげ、先行はやめると、すっきり腰をひいた方針に転換している。第六次産業政策では空洞化防止を基本に、賃金政策も個別賃金移行について五年間で基礎を固め、五年後第七次産業政策で移行、時短も九六年一八〇〇時間をあきらめて、二千年までと大きく後退している。

#### 能力主義が前面化（商業労連）

驚くべきは商業労連の新運動方針だ。第二一回大会（6・21、22）で、九六年春闘以降の取りくみについて「原資の拡大が期待できない状況のもと、右肩上りの成長を前提とした既存の賃金制度から、個人の働きがいと企業の発展調和させた適正有効な配分」を主張し、具体的には「複線型、参加型人事制度への移行」を組合自らが要求し、①加点人事システムの開発、②上司と部下が対話して業務目標を決める制度、③管理職だけでなく、専門、専任職へ昇進する選択肢を広げる制度の導入。

賃金制度では職務、職能、業績をベースにした仕事賃金に切り換え、定昇は一律でなく各人の能力、業績を考慮し、一般社員は職能給と生活給を併存。管理職と専門職は完全職能給プラス役割給・業績給、職務給の複線型賃金を導入、そのうえで、一定の職務・所得年齢に達した層は年俸制に切り換えなどを提案している。

これらの新システムはすでに東武、ベアゼロ（年功部分廃止、人事考課（面接）で賃金決定）、ダイエーの全社員年俸制導入。松屋ベア要求見送り、などという形で各組合で実施されてるのである。

## 日経連の意図が貫徹

こういう労働組合の態度では日経連の意図は貫徹する。日経連報告の背景には日本資本主義の今後に対する深刻な危機感がある。経済環境の変化に対応する新たな資本蓄積体制の実現、労働力の搾取強化のモデルチェンジの号令が日経連報告であり、これをバックアップしているのが経済白書（7・25）と労働白書（6・27）だ。両白書は日経連報告と全く同じ情勢認識に立って、産業構造の転換と雇用大流動化を推進しようとしている。そのためには「ルック・イースト」ともてはやされた日本の労使関係さえ、企業別労働組合さえ握っておけば、あとは捨て去ってもよいのである。

そして労働省の「日本的雇用制度研究会」（座長白井泰四郎JIL顧問）が中間報告（4・4）を発表して、「終身雇用制維持のうえに年功制賃金の見直し」を早々に打ち出しているのである。

人事制度の転換と相まって日経連報告の狙いは、大量（二千万人）の不安定雇用労働者を生み出し（プールする）、必要なとき、必要な人材を、必要な期間だけ採用するジャスト・イン・マンパワー、人間のカンバン方式の導入にはかならない。

外部労働市場を労働組合はいかにしてコントロールするのか、人権無視の低賃金構造、過労死を生み出すメカニズムにいかにかに挑戦していくのか、連合が準備している「成熟社会への挑戦」などという甘い認識ではとうてい太刀打ち出来そうにない。

改めて政・官・財一体の二一世紀戦略を厳密に分析し、これを論破し、この攻撃に立ち向かう主体形成こそが緊急の課題である。（K・Y）

## 余りにも恥知らずではあるまいか

——フランスの核実験について——

七月九日、核実験の再開をシラク大統領が発表すると、その二日後には早くも六〇〇名を越えるフランスの科学者の反対アピールが出た。そのよびかけ人のひとりであるパリの科学者研究ナシヨナル・センターのピエール・ジャグル教授は、「ND」（ノイエス・ドイチ ユランド）紙のバリ通信員のインタビュに答えている。

この反対アピールが出されたいきさつは？

「シラク大統領は核実験再開の演説のなかで、科学者の専門的意見なるものをもち出して自分の決定を正当化しました。そうすることによって、核兵器の新しいシステムの開発をめざす政治的意図を隠したわけです。そこでわれわれとしても、アピールを起草し、そのなかでこの決定は科学者の意見とはあいられないことを明らかにしたわけです。」

シラクの決定の背後にあるものは何なのですか？

「それは本来は政治家が答えることですが、私もフランス国民の一人として、この問題を考えてみました。私の考えでは、内政上も外政上もなんの理由もないとしかいいようがありません。シラクは強い大統領として自分を演出してみたいのです。そんな計算づくがあるとすれば、かれは見識ある政治家とはいえません」

この実験は、実験室のシミュレーションを準備するのに必要だということですが。

「核爆発のシミュレーションも問題を解決するものではありません。なぜなら、シミュレーションは新しい核実験を実施するために行うのであり、そしてそうしてはじめて核実験はまたより良いシミュレーションを可能にするものだからです。この悪循環を断ち切るためにこそ、正しい政治的決定が必要なのです」

冷戦の終結は核軍備を終らせるものではなかったのでしょうか？

「そのように、私は確信しています。それがこのたびの私の行動の出発点です。恐怖の『均衡』はいわば自壊してしまっただけです。核兵器の過度の累積は、どのようにしても理由づけることはできません。フランスもまた核兵器を大量に貯蔵しています。いまこそ、核軍縮に真剣に取りくむべきだと私は考えます。むろん、若干の前進はありました。しかし、もっと断固として進めるべきなのです。核非拡散条約の調印によって、いくつかの国が核兵器を保有し、その他の国ぐにはもたないという状況が承認されました。だがそれは、じつさいには一定の期間に限られる状況であり、しかも、それは核兵器の保有国には、この兵器の近代化を進める権利など与えられていないという条件の下での状況でしかないのです。一方で核非拡散条約を調印し、他方で核実験の再開を告知するなどということは、世界の多くの人々に受け容れられるはずがありません。」

シラクの決定は広島への原子爆弾の投下の五〇周年とほとんど重り合っています。あなたはこのことをどのように感じられますか。

「被爆した都市やおびただしい犠牲者たちの写真をみる人は、人類の未来ということに思いを致すでしょう。この思い出がいまもお生々しく、そして現在この国の門前で実験が行われようとしている日本人の立場に立つて考えれば、これはあまりにも恥知らずのことです。フランスでは国民的な、いや民族主義的ともいえるような議論で事柄の正当化が図られています。そうした全国民の名をもってする政策構想は、私にとっては、考えられる最悪なものです。」

このアピールに署名した科学者の政治的信念は人によりさまざまでしょうか？

「その通りです。ただ科学者として、科学の名が損なわれてゆくことを懸念しているのです。科学が大衆のなかで、ますます墮落しているようにみられるかどうかは、われわれにはどうでもよい問題ではありません。だからこそ、われわれはアピールのなかで、いつの日にか、核恐怖によって、科学のいつその進歩を願う人の心が萎えてしまうことをおそれると書いたのです。数多い人類全体にかかわる問題を解決するためには、科学の進歩はなんとしても必要なのです。」

一九五〇年にフレデリック・ジョリオ・キュリーは、フランスの核軍備に反対したという理由で、原子エネルギー委員会の責任ある地位を解任されました。こうしたやり方をどう思いますか。

「フランスではジョリオ・キュリー、アメリカではロバート・オッペンハイマーがそうでした。旧ソ連のアンドレイ・サハロフについても同じようなことがいえます。科学者はその専門的知識によって力をえますが、政治家はそれを利用してしようとするのです。核もそうですし、レザーもそうです。今日では、科学者の力は生物学、物理学、化学の領域で広がっています。このことは科学者に、一国民としての役割に思いを寄せることが求められているということでもあります。そうした考えが、われわれ科学者のあいだで広がってゆくであろうと私は確信しています。」

(編集部)

## 「論語よみの論語かたり」をめざしたい

——「資本論」第二分冊を读了して——

資本論学習も「第一三章 機械装置と大工業 第一〇節大工業と農業」に到達した。資本論第一巻三分冊の内、第二分冊まで終了したといった方が歯切れよく耳に入り心地がいい。月一回の学習会で一三年間続いた。もともと資本論は天才中の天才が叡知を結集して完成させた著書であると言われる。軽かろうはずはない。天才の叡知が満載された資本論をやせ馬、運動不足の馬、たてがみのうすい馬やらが隊列を組み、山坂を登るように休み休みしてようやくここまで来た。あと残り三分の一で初期の目的である第一巻を終了できる。一頭の馬では荷が重すぎ、数頭の馬の寄せ集めで方向が定まらぬ。馭者がきて「愛の鞭」に励まされ、馬と馭者が一体となってようやく辿りついた。ここまで来るとやせ馬には多少の筋肉が、肥満ぎみの馬はそれなりにスリムになったような感がある。

「怠け者」が学習会に参加へ

ここで私が資本論を始めたいきさつを述べてみたい。私は元来怠け者である。「石に枕し、流れに漱ぐ」ではないが、仕事を終え枝豆をつまみにビールを飲みテレビを見る。これが日課で日々充実した生活を送っていた。時を同じくして、近辺で「資本論」の学習会を始めたことを耳にした。ご苦労なことである。

IT, S NOT MY BUSINESS. 何のためにこの英文をひっぱりだしたかその理由は、だいぶ以前に正月番組で「木枯らし紋次郎」の英語劇を見た記憶がある。その時の台詞「あつしにゃあ、関わりのねえこつてござんす」の英文がこれであった。要するに紋次郎の決まり文句の「自分には関係ない」ということが言いたいだけのことである。しかし、ほんとうに「関わりがないか」というとそうでもなく、日本人のNOには僅かにYESの部分が含まれていると言われるように多少関係がある。遠方に行くにはまず足の元的一步から、大きな衝突の前には小さな衝突があるのが世の常。この「資本論」の学習会の始まる数年前、某組織の中でミニ班というものがあつた。その中で「資本論」を読み始めた。始めたまっかきは某氏である。某氏が兄上の引越しかなかで久しぶりに再会された際、その兄上が一カ月間くらいの日程で資本論の講習を受けたという話をされたらしい。某氏はその時まで資本論を読んでいたかどうか定かでないが話の中で悔しい思いをされたのではないかと想像される。

かくして某氏の悔しさ（ここではそういうことにしておく）の中から「資本論」がはじまった。私以外の二人は資本論を全巻揃えていたようである。私はとりあえず第一巻だけ購入した。第二巻は必要になったらその時購入すればいいと考えた。その当時第一巻の価格は二九〇〇円である。しかし第二巻を購入する機会にはついに遭遇しなかった。始めたことは臆気に覚えているがどこまでやったか記憶にない。はつきりしていることは、この「資本論」第一巻だけが本棚のすみでホコリを身にまとい静かに納まっているだけである。私は怠け者であると前に述べたが、また用心深い性質でもある。およそ学習会と名のつくもので長続きしたためしがない。某組織のミニ班での経験もそうであるが「賃金・価格・利潤」「共産党宣言」「空想より科学」等々どれも中途半端である。近ごろ始まった

「資本論」もご多分に漏れず同じ運命を辿るだろうと予測し、自分としては静観していた。やがて一年以上が経過し、聞けばまだ例の資本論がまだ継続しているとのことである。その間にも初めから資本論を受講している人から熱心なお誘いもあった。学習会のなかにも一字一句丁寧にやっているらしいし、また一回の学習会でも五、六ページしか進まない。カメのような速度であるという。しからば遅れ馳せながら参上仕ろうと決心。後に気付いたのであるが自分は他人の口車にも乗りやすい性質なのである。以上が資本論を始めた経緯である。銚子では資本論学習会の始まる前「レーニン研」が開始されていた。こちらの方は三、四年で絶えたらしい。

#### 事前学習そして合宿

さて私は「第一章 第四節・商品の物神的性格とその秘密」から参加した。参加して半年間は資本論の理解はもちろん学習会の雰囲気にも馴染めずと沈黙していた。一言も発言しないのもストレスの蓄まるものである。以後質問なり一言ぐらいは発言するよう心がけてきた。学習会の進め方は各段落ごとに担当者を決め、当日までに各担当者がレポートを提出し、説明する方式である。参加者が順次各段落の読みからはじめる。この段階で事前学習が足りないことが判明すると講師から厳しい指摘をうける。「学習会に行つて講師が誤読や読めない漢字に遭遇した場合はまずバカにされる」とのことである。講師とはそういうものらしい。お陰さまで難しい漢字等は事前に調べて行く習慣がついてきた。資本論学習の心構えらしきものが分かってきた。

一回の学習会での速度が五、六ページ故、細かい字句にこだわり過ぎると全体の脈絡がつかめないし、全体の流れを把握しても細かい部分の理解がないと正確さに欠ける。何回よんでも難解である。難解な文章を何回読むかで理解度が決まる。理解できなくとも難しいということが分かれればそれでいいと講師から慰めを受けながら続けてきた。

資本論の他にも祝日、祭日を利用しての合宿を行いレーニン著「マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分」や「宗教に対する労働者党の態度について」を学習した。「宗教に対する労働党の態度について」の論文の中に「宗教は民衆の阿片である」というマルクスの言葉が一、二箇所でてくる。本論とは関係ないが自分ではこの有名な言葉を次のように解釈している。「阿片は人体にとって有害である。これと同様で宗教も民衆にとって有害である。当初このように解釈していたのであるが、そうではなく何故民衆が宗教に走るのか。それは現実の世界の苦しみ、不安から逃れるために宗教に救いを求める。しかし宗教では現実の苦しみ、不安は解決できない。現実の社会の法則を認識し正しく適用することにより解決が可能となる。宗教は阿片が鎮痛剤として効くようにその程度の役割しか果たさない。根本的な解決はできない。そういう意味で宗教は民衆の阿片であると述べているのではないか。そして完全に発達した社会では宗教は存在しなくなるだろう。」とこのように解釈しているのであるが今一つ自信がない。

#### 生活内容、人生観に変化

難解な資本論であるが、この学習会に参加するようになってから人生観が変わったという大げさになるが自分の生活内容が変化してきたことは事実である。前に述べた通り、仕事が終わりビールを飲みながらテレビを見る。休日は、暇な時はパチンコ、麻雀、時々

スポーツに汗を流すという生活であった。それが学習会に参加してから少しは小説などを読むようになってきた。いつぞや「まなぶ」の講演会に参加しており、その時の講師が皆さんは一年間に週刊誌を除き何冊位の本を読みますかというような質問があり、せめて一カ月に一冊、年間一二冊以上は読んだ方がいいというような事を言っていた。それが頭の隅に残っていて資本論を始めたことにより、徐々に現実のものとなってきた。それではどんな本を読んだのだと問われると具体的な著書名をあげなければならぬ。そんなヤボなことはしたくない。年一〇冊位読むということで勘弁してもらいたい。でも差し障りのない所で児童文学のお薦めの図書をあげておく。「石車に乗っても口車に乗るな！」が自分の戒めである。私のすすめなどを信ずる人はまず無いと信じている。それでも一応列記しておく。灰谷健次郎著「兎の眼」「砂場の少年」「海の物語」、吉田足日著「大きい一年生と小さい二年生」「宿題ひきうけ株式会社」、宮川ひろ著「もぐら原っぱのなかまたち」「るすばん先生」、丘修三著「あんちゃんが行く」「ぼくのお姉さん」「神々の住む深い森の中で」、及川和男著「森は呼んでいる」、M・ビクマル著「にじ色のガラスびん」等々。

麻雀、パチンコはこころ一年来やっていない。別にやらないからといって自慢しているわけではない。スポーツもサークルに入れば制約を受ける。テニスの練習などはボールだけ打って、ネットの後片付けやコート整備をやらす「ハイ、さようなら」という訳にはいかない。自分の都合に合わせてできるジョギング等に行っている。要するに何が言いたいかというと日々の生活の中で時間の使い方が変わってきたということである。

活動家を目指してきたわけではないし、なるつもりもない。適齢期なのか、それとも前任者が疲労困憊してきたのか不思議とおハチが廻ってくる。他人の勧めに安易のつてしまうのである。こうなると活動家としてはこうあらねばと背伸びをする。活動家たるべき者は趣味のサークルは静と動、各一つづつが限界である。ここが活動家と日和見主義者の分水嶺である。趣味と活動が重複した場合、活動を優先させるなどと口では言いつつもいざとなると人間弱いものである。趣味を優先させてしまふ。自身大いに反省するところである。

学習会終了後の楽しみは交流会である。交流会を我が家でやる場合もたびたびあった。子供は現在小学六年である。この子供は二、三歳ころから交流会に参加している。酒の匂いをかいで成長してきた。幼児期から大勢の大人と接してきたので人見知りもせず、よくしゃべる。今では「今日は資本論のある日だ」などと口にする。親の素行が子供の口から漏れる。息子の同級生の親はまず資本論なんぞは読んでいないだろう。私はめずらしい親なのである。

### 第一巻読了めざす

最後に、資本論の第一巻・第二分冊まで読み終えて何が書いてあるのだと問われれば、一言でいって「分からない」としか答えようがない。この「分からない」という言葉はまた資本論を読んだ者同士でないと味わえない言葉なのである。しかし第二分冊までの間で、このことについては資本論のどの辺りに書かれているかおおよその見当はつくようになってくる。このことは参加者全員共通しているところと思う。

第一巻終了まであと三分の一である。どんなに時間がかかろうと今のペースでしかついでゆけない。自分がどんな馬なのか察しがつく。量質転化という言葉もある。駄馬も麒麟に変身することも無きにしもあらず。「論語よみの論語しらず」は困りものであるが、しかし少なくとも読んでいることは確かである。もっと始末の悪いのは「論語よまずの論語

かたり」である。マルクスの圧巻は資本論である。「論語よみの論語かたり」を指して頑張りたい。

追伸 一三年間、東京から銚子まで講師として来て頂いた藤澤晃氏にはあらためて御礼を申し上げます。長い間有難うございました。  
(一九九五年七月 真田 茂)

## ◇ 読者からのおたより ◇

嫌がらせデマ宣伝に抗す 七月十六日以降、〇〇学校・〇〇市職・〇〇会社の労組名を名乗り、支部・闘争団の自宅を訪問・電話をしたりしている。これは、革マル派の人物が偽名を使って嫌がらせ行為を行なっているものである。

これらは、第一に昨年末の二百二億賠償事件解決を受け、残る未解決課題の採用差別事件をはじめとする労使紛争の全面解決に対し、運輸省が動き出したことに対する妨害と牽制である。

第二に、JR労使紛争の全面解決は、JR総連(東労組)にとって国労敵視の労務政策(特にJR東日本会社)の崩壊に直結し、革マル派が中心をなすJR総連の組織防衛上の非常事態だからである。

第三に、革マル派による嫌がらせを装っているが、深刻なのは、背後のJR総連及びJR東日本会社であり、労使紛争によって現在の異常な労使関係の転換を余儀なくされることへの焦りである。

このように、今春から集中的に繰り返されている革マル派の攻撃は、彼らの機関紙「解放」による謀略に満ちた国労攻撃の宣伝が、JR総連・JR東労組のどぎつい主張と瓜二つであるのは、決して偶然ではない。謀略を手段として人を落し入れようとする行為を、断じて許してはならない。我々は更に団結を強め、この種攻撃を断固として克服していく、国鉄闘争の全面勝利を勝ちとっていく。  
(国労博多闘争団ニュース)

鳥原の子供たちに夏休みのプレゼント 昨年も取り組んだ、鳥原の子供たちを福岡に招待した。今年も七月二十三日～二十四日かけて大野木場小学校の児童二十七名、先生・保護者五名、総勢三十二名が来博した。博多駅・福岡市地下鉄・福岡タワー・福岡ドーム・マリワールド・サンシャインプール等で見学し楽しんだ。

福岡ドームでは、国労博多支部の組合員・家族もまじえて一五〇名でダイエーVS日本ハム戦のプロ野球を観戦し、サンシャインプールでは、夏空のもと水と遊んだ。普賢岳に負けずに、元気に頑張っている子供たちだ。頑張れ！鳥原の子供たち。取組みにご協力いただいた労組・団体・関係者のみなさんありがとうございました。(国労博多闘争団ニュースより) 組合ってなんだ？ 新採の看護婦が組合に加入しない。看護婦の組合員の相次ぐ脱退、という事態から組合組織率が大幅に低下し、大きな問題となっています。

この状況を踏まえ、職場委員会として何ができるか、何かしようということになり、組合員あるいは組合未加入者は労働組合をどう考えているのか、のアンケート調査を取り組むことになりました。今までの執行部にはない新しい発想でのアンケートです。みなさん、是非、御協力下さい。  
(組合ニュース・協病帯広支部)

読書紹介20―「戦後五〇年薄れる前に 今年は特に「敗戦後五〇年」、戦争と平和を考え、戦後の世界と日本の歩みを振り返る出版企画が相次いでいる。

日本図書センターが「平和図書館シリーズ」最新刊として刊行した『写真絵画集成 子どもたちに伝える 世界の戦争と平和』（全6巻）は、第二次世界大戦から湾岸戦争までの戦争の実態、そしてその中の民衆や子供たちの姿を、約二〇〇〇点の写真を通して描き出したビジュアル資料集。同社では、戦争児童文学の代表作八七点を収録した『戦争と平和「子ども文学館」（全20巻別巻1）』も刊行している。

戦後史をまんがで描き出したのが、岩崎書店から出た『まんがで見る日本の戦後50年』（全10巻）。一九四五年から一九九四年まで、各巻を五年ごとに区切って、一年二五テーマづつをヒトコマまんがで紹介している。また同社からは、満州事変から新憲法制定までに行きたる、日本人の戦争体験の継承をめざして、全10巻構成の『語りつごうアジア・太平洋戦争』も刊行されている。

大日本図書『新聞で調べよう現代日本の50年』（全5巻）は、戦後日本の出来事約六〇〇件を、写真と新聞記事形式にまとめ、調べ学習の教材として利用してもらおうという企画。約10年ごとに1巻にまとめ、ルビつきの記事でしつかり戦後の歩みを見渡せる。

一方、戦争をテーマとした児童文学の名作の、重版や企画出版も多い。理論社が刊行する赤木由子『二つの国の物語』（装画・鈴木たくま）、しかたしん『国境』（同・杉浦範茂）、今江祥智『ぼんぼん』（同・長新太）の三冊は、自らの戦争体験に根ざした大河小説の名作三作をそれぞれ全一冊にまとめた戦後五〇年の特別企画だ。

これまで刊行されてきた戦争関連の読み物や、絵本の名作をまとめてセット販売したり、フェアを企画するケースもめだつ。児童文学出版の金の星社の場合、同社の刊行する高木敏子の『ガラスのうさぎ』をはじめ、四〇点あまりの戦争関連図書をまとめて紹介するパンフレット「平和を愛する人は、地球にやさしい人」を作成、読書案内として配布している。

新聞社が保存する豊富な写真資料をもとにした『戦後50年』（毎日新聞社）や、『朝日歴史写真ライブラリー／戦争と庶民』（朝日新聞社）、元米軍カメラマンによる終戦直後の日本の記録『トランクの中の日本』（小学館）など、戦争、戦後記録写真集も続々と出ており、中・高校生には当時の追体験の手がかりになりそうだ。

生々しい戦争の記憶がますます遠ざかりつつある戦後五〇年の今夏、子どもたちは、人々がさまざまな思いを込めて書きとめ、描いてきた戦争の実相と、戦争の歩みとを、どう読みとってくれるのだろうか。

（日刊ちゅうたん）

## 『政界再編後を読む』（上野建一著）のすすめ

社会党結党は一九四五年十一月二日。今年、五十歳を迎える社会党だが、危急存亡の危機にある。社会党の五十年は波乱万丈の歴史だった。

本書は労働再編後、ピッチをあげて進行した政界再編の背景、本質、現状をリアルに描きだす。そして危急存亡の危機にある社会党再建の方途を示している。

政治に関心をもつすべての人々の必読の書である。ぜひ一読を。そして日本の政治と社会党、護憲勢力の結集の方途を考え行動しよう。

本書は定価千五百円。割引制度もあります。お申し込みは社会通信社へ。